

地域映像アーカイブの活用に関する一考察

——十日町情報館ワークショップ実践の試み——

北 村 順 生

1. はじめに

1-1. 地域の映像アーカイブの活用について

本稿は、新潟大学地域映像アーカイブ・センターがこれまでの実践的活動の中で構築してきた映像アーカイブを、果たしてどのように活用していくことが可能であるのか、そこでは地域社会にどのような影響を与えることができるのかについて検討することを目的とする。

近年、デジタル技術の革新に伴う記憶容量の飛躍的な増大を背景として、さまざまな形態の人的、社会的営みを記録し、保存していこうというアーカイブの試みが広がりつつある。とりわけ、近代以降の社会の中で大きな位置を占めるようになった各種の視覚表現を用いた映像メディアについては、21世紀の現在の地点から自らの歩んできた道りを振り返りたいという時代の趨勢の中で、映像アーカイブとして多くの実践事例が生まれてきている。

しかし、そうした映像アーカイブの収集や構築には新たな試みが生まれつつある一方で、そのアーカイブをどのように活用していくことができるのかという点については、まだまだ試行錯誤の状態にあると言える。もちろん、アーカイブを構築すること自体にも大きな意義はある。例えばそのままでは散逸し、やがては消失してしまうだろう貴重な映像資料を、次世代に確実に受け渡していくことは重要だ。また、バラバラだった映像資料が一つのアーカイブとして蓄積され、比較分析が可能になることで従来は見いだせなかった新たな視点を獲得できるという研究上の利点も少なくない。ただし、これらのメリットは直接的には研究者や映像実務者などの立場からみたものに限られる。

映像アーカイブには、もっと積極的に、より幅広い形で社会に活用していく可能性があるのではないだろうか。そのためには、どのような方策があるのだろうか。本稿は、このような問題意識に基づいた実践的研究の予備的考察をなすものである。

1-2. にいがた地域映像アーカイブの概要

本稿を先に進めるにあたって、そのベースとなる「にいがた地域映像アーカイブ」プロジェクトについて、その概要を記しておく。

本プロジェクトは、2008年度より、新潟大学人文学部のメンバーを中心に進められてきた。新潟大学地域映像アーカイブ・センターを拠点に活動が展開しており、新潟県内を中心に残されてきた写真や映画、絵葉書などの映像資料を発掘、収集、整理、保存、活用してきた。これらの資料についてはデジタル化の処理を行い、データベース化を進めており、2012年春からは学内および教育研究目的に限定した形で試験的に公開、運用を行っている。その公開点数は随時拡大しているが、2013年3月末時点で写真約27,000点、動画約300本を公開している。

2. 映像アーカイブ活用の現状

2-1. 映像アーカイブの活用と地域

映像アーカイブの活用について検討していく際に、それぞれの映像アーカイブがもっている性格や特徴について考慮していくことはたいへん重要になってくる。というのも、さまざまなレベルのアーカイブが誕生してくる中で、その主体や目的、映像資料の中身などにより、同じ映像アーカイブでもその内容は大きく異なってくるからだ。この点で、水島（2009）がアーカイブを構築する主体およびその種類によって設けた分類は有益に思われる。それによると、既存のアーカイブは次の三層に分けて考えられるという。

- (1) 包括的な社会組織が構築するアーカイブ
- (2) 中間組織的アーカイブ

(3) 個人によるインディペンデントなアーカイブ

このうち(1)については、「明示的な社会的システム — たとえば既存の国家的機関，メディアや全国的ネットワークをもった公共機関」と説明されている。映像アーカイブとしては、公共放送のNHKが構築しているNHKアーカイブスやNHK・民放が共同で運用している放送ライブラリーなどがこれにあたるであろう。一方で(3)については、「制作者およびデジタル録画が可能となった個人的視聴環境 = 保存環境をベースとした映像コレクション」を指すものとされている。この代表的なものは、子どもの成長の記録を取めたホームムービーであろう。そして本稿の観点からみて重要なのが(2)であるが、これは「地域的あるいは特定の主題をもった組織；自治体，地方放送局，図書館・博物館，大学，NPOや映像祭などの顕彰組織等々による」と説明されている。いわば(1)のナショナルな領域と(3)のプライベートな領域とをつなぐ，まさに中間的な領域として位置付けられるのであるが，水島は両者をつなぐ媒介的な役割それ自身が「仮説的な秩序」として流動性を果たす点に着目している。

この点は，アーカイブの活用という点から見ても重要だと思われる。なぜなら，アーカイブの役割を収集や保存に留まらせるのではなく，より積極的に，言い換えれば戦略的にアーカイブを社会や地域へと開いていくことが，この中間組織的なアーカイブにおいては可能であるし，求められているからだ。その際に重要になるのが，各々のアーカイブのもつ性格や特徴に応じた活用の方法を検討することであり，そこには少なからず個別性があるという点だ。地域のアーカイブで考えれば，それぞれの地域の風土や歴史的，文化的な特徴があり，それに対応した多様な地域アーカイブが存在する。そうなると，ある地域で優れた活用のあり方が，他の地域でも必ずしも有効だということにはならない。地域ごとの特徴と，それに基づく地域アーカイブの特徴にあわせた活用について考えていく必要がある。

2-2. 地域アーカイブ活用のレベル

それではより実際に，地域アーカイブを活用していく方向にはどのようなものが考えられるであろうか。その具体的な方策はまだ未開拓の領域である

が、しかしそれらは大きく2つのレベルに大別できるであろう。

一つは、組織的、制度的な地域アーカイブの活用のレベルだ。これは、地域内のさまざまな組織や機関、団体とコラボレーションの関係性を構築することで、制度的かつ恒常的に地域アーカイブを活用するシステムを作ることである。その代表例が、地域のアーカイブを学校教育の現場で活用していくことだ。アーカイブの目的と学校という教育組織の目的とは、当然ながら異なるものであり一致しない。しかし、学校の授業の中で郷土の歴史を学ぶ場合には、地域のアーカイブが持つ映像資料は教材としておおいに活用する価値が生まれてくる。このように、地域においてそれぞれ異なる目的を持つ組織同士が、特定の限定された活動において連携することは、アーカイブの活用としてありうるであろう。

にいがた地域映像アーカイブに関していえば、この形の実践例は2つあげられる。一つは、南魚沼市の教育委員会との連携の中で、同市内の小学校に本アーカイブの資料が教材として配布されたことだ。配布されたアーカイブの資料は、授業の教材としての活用が見込まれている。もう一件は、新潟県立図書館との連携であり、2014年10月より同図書館内に専用端末を置いて本アーカイブへのアクセスが可能になったことだ。県立図書館との連携は、将来的な構想としては他の市町村図書館や博物館・美術館との連携をも視野に入れたものである。

一方で、もう一つの地域アーカイブの活用の方向は、ある特定の限定された場の中で、より直接的に地域の人々への活用を図っていくことだ。例えば地域の住民が参加するワークショップを開催し、その中でアーカイブを人々に活用してもらう形がある。こうしたやり方は、前述の組織的、制度的な方法がより広範かつ持続的な住民への活用が図れるのに対して、その対象は限定的かつ単発的である。逆に言えば、前者の組織的、制度的な方法では基本的には連携する組織の枠組みの中でアーカイブを活用するということとなり、その活用方法は限定的であると言えるが、後者の直接的な形での活用は、単発的である分だけ実験的で新規性の高い活用方法が創発する可能性もある。

今回、にいがた地域映像アーカイブで行った活用事例であるワークショップ

実践は、後者に当てはまるものである。その具体的な内容について、次章にて紹介する。

2-3. 地域映像アーカイブの活用事例

今回のワークショップ実践を紹介する前に、本ワークショップの実施にあたり大きな影響を受けた他地域における実践事例について簡単に紹介する。それは、仙台市を中心に活動を行っている「NPO法人20世紀アーカイブ仙台」の活動である。

同法人は、有限会社クリップクラブ、風の時編集部、東北放送施設株式会社により2009年に設立されたNPOであるが、仙台市を中心とした地域の写真や八ミリフィルムの資料を収集、保存しつつ、住民向けのワークショップを積極的に展開している。その活動範囲は宮城県全域に広がっており、とくに東日本大震災以降は、各地の避難所や仮設住宅での上映会の開催や、映像を通して地域について参加者が語り合うワークショップの運営などを行っている。

同法人の特徴は、多彩な手法を用いて住民たちを巻き込んでいくユニークなワークショップのスタイルにある。その中でも映像を用いたワークショップの際に、古い映像の上映だけではなく、その当時に日常的に利用されていた日用品を活用し、映像の上映前にモノを通して語り合う手法が用いられる。こうした手法は、ワークショップにおける参加者同士の議論の活性化を図るものとして大変有効であり、われわれのワークショップ実践においても参考となった。この点については次章で詳しく述べる。

3. ワークショップ実践

3-1. にいがた地域映像アーカイブにおけるワークショップ実践の概要

にいがた地域映像アーカイブにおいては、活動の当初からアーカイブを活用した所蔵映像の展示・上映会を実施してきている。最初の展示・上映会は2009年2月に新潟市民会館小ホールでシンポジウムと併せて開催され、その後も年に複数回、国外を含む県内外の各地で映像の展示・上映会を行ってきた。しか

し、これらの展示・上映会においては参加者の参加形態は基本的に映像を鑑賞する形に限られていた。そこで今年度より新たに、参加者が映像をもとに語り合う、いわばワークショップ形式の実践を開始した。その概要は次の通りである。

(1) 「映像を見ながら語り合おう 昭和の十日町」ワークショップ

■日時：2014年8月24日（日）13：30～14：30

■場所：十日町情報館「集会室」

■主催：新潟大学人文学部、十日町市古文書整理ボランティア

■主管：十日町市教育委員会文化財課

■主旨：新潟大学人文学部・十日町市古文書整理ボランティア合同写真展「中俣正義・山内与喜男二人展 ～十日町・むらとまちの暮らし～」の開催に際して、市民のみなさんに十日町で撮影された映像についてお互いに語り合う場所と時間を設ける。写真や映画が撮影された場所や撮影されている物、撮影されている人等についての情報を提供していただくと同時に、かつての十日町での仕事、学校、家庭での生活のありようをあらためて見直し、それらが現在までどのように変容してきたのかを考えることで、将来の地域像について思いをはせる。

■ファシリテーター：

- ・北村 順生（新潟大学人文学部准教授）
- ・原田 健一（新潟大学人文学部教授）
- ・高橋由美子（十日町市教育委員会）
- ・鈴木 潤（新潟大学大学院現代社会文化研究科博士前期課程1年）
- ・江尻 晴菜（新潟大学人文学部4年）
- ・小林 梓（新潟大学人文学部4年）
- ・森 翔吾（新潟大学人文学部3年）
- ・大内 斎之（新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程1年）

■プログラム：

- 第1部：アイスブレイク「なにコレ？ 昭和の道具」 13：30～13：45
【概要】かつて一般に使用されていて、現在は使われていない道具（せんたく板、おひつ、など）やおもちゃなどを数点みせて、その名前や用途などについて参加者に問いかける。
- 第2部：「どこコレ？・なにコレ？・だれコレ？」 13：45～14：15
【概要】中俣正義・山内与喜男両氏が撮影した写真と動画を数点、プロジェクトで映写し、撮影された場所や撮影されている物（目的や用途、時期など）、撮影されている人物について参加者に問いかける。そうした問いかけをきっかけとして、当時の十日町における生活の様子など、さまざまな話を参加者より聞き出す。
- 第3部：「みんなで話そう 昭和の十日町」 14：15～14：30
【概要】ファシリテーターの学生たちが参加者たちの中に入り、それぞれ一対一あるいは一対数人のグループで、写真を見た感想や当時の生活などについて聞き取りを行う。学生たちは、さまざまな質問を投げかけると同時に、その記録を録音もしくは録画する。

(2) 「映像を見ながら語り合おう 昭和の南魚沼」ワークショップ

■日時：2014年10月19日（日）15：30～16：30（記念講演終了後）

■場所：南魚沼市図書館展多目的ホール

■主催：南魚沼市、新潟大学人文学部

■主旨：南魚沼市・新潟大学人文学部連携協定記念・大学地域連携プロジェクト合同写真展「今成家写真と南魚沼の文化」の開催に際して、市民のみならずご参加いただくワークショップを実施する。本ワークショップでは、参加者と一緒に昭和の南魚沼の映像を見ながら、かつての南魚沼での仕事、学校、家庭での生活のありようについて語り合ってもらおう。地域のこれまでの歩みに思いをはせると同時に、将来の地域像について考える。

■進行：原田健一（新潟大学人文学部）

3-2. 十日町ワークショップ実践の事例

ここでは、2014年8月24日に実施した十日町情報館でのワークショップ実践をもとに、地域映像アーカイブの活用における特徴とその可能性について、いくつかの論点を提示していく。

(1) リアルなモノと映像との併用による議論の活性化

十日町におけるワークショップ実践においては、前述のNPO法人20世紀アーカイブ仙台の方式を参考にして、十日町博物館が所蔵する民具を冒頭で取り上げ、映像を視聴する前の第1部で活用した。こうしたやり方を用いることで、映像を通して地域の生活について語るというその後の行動を、より容易にさせる効果があったように思われる。

例えば、かつての十日町地域で一般的に使用されていた「機械ゾリ」と呼ばれるソリについて、第1部において以下のようなやり取りが行われた。こうしたやり取りは、後の第2部で用いる映像の中でソリが出てきた際に話が引き継がれて、参加者の間での議論をより活性化させる効果があったと言える。(文中の発言者名で、「男性」または「女性」とあるものは参加者による発言を指す。)

北村：あとじゃあ、次はここにある大きな目立つやつですけども、これは、
名前はなんて言うんでしょう。

女性：ソリ。よく持ってきたね。

女性：機械ゾリ

北村：機械ゾリ。何に使うんですか。荷物を。

女性：荷物載っけたり、病人を運んだり。

北村：どうやって使うんですか？

高橋：ソリを曳いたことのある方いらっしゃいますか？

女性：曳かれたことはある(笑)。

女性：薪や何かを、全部運び出すためのものでした。

北村：薪を運ぶ。

女性：はい。

男性：冬場は、荷物を何でもこれで運んだんですよ。機屋さんも反物を入れて運んだりして。

女性：今のトラックの代わりにね。

女性：そうそうそう。

北村：そうすると、どこの家にも一家に1つあったような。

男性：まあ、だいたいあったろうな。

北村：だいたいあったんですね。

男性：ちょっと曳いてやってくんね。

男性：大丈夫。

男性：(曳こうとして紐をかつぎ) ちょっと長すぎるなあ。

男性：長えねえ。ちょっと長えねえ。

男性：長えねえ。

男性：この方にグーッと(笑)。(実際に引いてみる)

北村：なんでこれ機械ゾリ、「機械」っていうんですか？

高橋：「山ゾリ」という一本の木から切りだした、もうちょっと原始的なソリがあるんですけども、それに対して、金属部品とかで組み立てているので、たぶん「機械ゾリ」っていうと思うんです。あと、「手引きゾリ」っていう名前もあるんですよ。

男性：一般的には、各家庭の場合は「ソリ」と言ってた。

北村：もう「ソリ」と。

男性：そう、「ソリ」。簡単に。山ゾリってのはもっと大きさが違う。

女性：この形にして、もっと大きくして、二本にして、こうして紐つけて。

男性：あの、(展示写真の中に) コロ出しているのの写真がありましたよね。

北村：はいはいはい、コロ出しですね。

女性：もっとでっかいソリで。

北村：薪を山から。

女性：そう、薪をね。

男性：私は会社に勤めていたころに、うちの製品は鉄が多いもんでしたから、

毎日夕方出荷するんですね。そうするときに、通り（を歩く人）が
少ないもんですから、このソリにつけて、毎夕方出荷する。

北村：雪のないとこだとリヤカーとかありますけど、その代わりにこういう
の方が運びやすいってことですね。

女性：夏はリヤカー使ったんね。

北村：夏はリヤカーを使う。

女性：荷車とか。

女性：今のトラックの代わりにね。

女性：そうそう。

女性：昔は、これで行列だったのよ。

北村：これを、みんな。

女性：これを引いている人で。雪の間を。

北村：行列はしてないですけど、写真でもありますね。

女性：写真あるでしょ。山内さんの写真にいっぱいね、ありますよ。

原田：今はあれなんですか。ソリは使わないで車ですか。やっぱり。

男性：もう技術が進んでるんで、今はソリを引いていると、たぶん・・・。

女性：今だと、ソリ走るとこねえんがね。

男性：ソリ自体がもうない。

女性：ないねえ。今。

男子：使い道がねえあんで。

(2) 地域の「記憶」を呼び起こす語り

十日町市は、かつては日本有数の織物の産地として栄えた地域である。下記に紹介するやり取りの中にあるように、当日の参加者全員が織物の関連産業で働いていたことから分かる。このような地域の歴史や文化を呼び起こすのに際して、映像のもつ喚起力がやはり強力なものがある。

北村：これは、機織りをしているんだと思うんですが。

女性：撚り込み（よりこみ）。終わったのと新しいのと、糸を繋ぐの。

北村：あ、糸を繋ぐ。

女性：終わった玉と新しい玉をこうつなぎ合わせる。

北村：それを、なんていうんですか？

女性：撚り込み。

北村：ゆりこみ？

女性：撚り込みよ。

北村：撚り込みですね。これ、みんな手作業で。

女性：手作業。一本一本ね。

北村：わあ、すごいですね。これはどっかの工場の中でしょうか。

女性：二幅

北村：二幅？

男性：同時に二束。

女性：広幅だね。幅が広いね。

北村：そうじゃないのは一幅と。この方が新しいんですか、二幅。これは、どなたかお分かりでしょうか。

女性：模様織り。

北村：あ、模様織り。これが模様になっているんですね。

男性：で、それが縦糸を操作するカードなんですよ。それが。

北村：これですか？

男性：ええ。

北村：あ、これは織物ではなくカードなんですな。

男性：そうそう

山内：ボール紙みたいなやつに、穴が空いているんです。

男性：模様を見て穴を開ける。

男性：で、その穴1つずつが縦糸一本ずつの操作になる。

女性：模様紙。穴が空いてそれで糸がこう。

北村：では、この穴の位置で織り方が決まってくる。

男性：模様が決まるんですね。

男性：カードがこのくらいの幅で、長さがこんくらいあるんですよ。で、そ

れが一枚で横糸一本に当たる。

山内：だから、ザーッとものすごい量でもう。

北村：これを見るだけでも、もうすごく量がありますよね。

男性：まだ少ない方ですよ。

男子：これは三幅だ。

北村：三幅っていうのは、三反分ですか？

男性：三反分同じやつです。

北村：すると相当新しいというか。

男性：大量生産。量産できるんです。

北村：そうになると、この人達はあんまり難しいことをしないでいいということですか？

女性：糸が切れねえように。

男性：横糸が無くなった時に交換するとか、縦糸が切れた時に繋ぐとか。

高橋：ものすごいうるさかったんじゃないですか？ガシガシガシガシ。

男性：うるさいですよ。でも、この脇で子どもは寝るんですよ（笑）。

女性：〇〇さんの家じゃ、穴の空いたこういう紙を作ってたんでしょ？

男性：うちで作ってました。

女性：専門家ね。

北村：これを。紙なんですね、ダンボール紙。

男性：ボール紙なんです。

女性：ダンボールじゃなくてボール紙。

女性：それに穴開けて。で、そこで糸が上がったり下がったり。その専門家なんですよ。

男性：板紙ですよ。

北村：織物の町ならではですね。皆さん、織物関係で働いてた方、いらっしゃいますか？

（全員が手を挙げる。）

北村：あ、みんなそうなんですか。全員ですか。そうですか。

(3) 個別の映像に関する知識・情報の収集

映像の舞台となった地域の住民が参加するワークショップの場では、アーカイブされた映像資料に関する細かな知識や情報が得られることも多い。今回のワークショップにおいても、参加者である住民から、映像に関するさまざまな知識や情報が提供された。

中でも、以下に紹介するように、思いがけず映像の被写体として参加者本人やその家族が写っている場合も、このようなワークショップ実践の中ではしばしば生じることがある。

男子：鍋フタ。

男性：あ、おらんちだ、ほら（笑）！

男性：お父さん？お母さん？

男性：うん。

北村：え？

男性：私の親父です。

北村：こちらが！そうですか。これ、鍋フタを？

男性：大工じゃなくて、桶職人。けれども、桶になると持ってきてもダメなんね。売れにゃあ。それで今度は、こういうもの作り出したら売れた。1日に40万。あの当時ね。

北村：いつぐらいですか？

男性：35年。

北村：昭和35年。

男性：全部フタですよ、これ。

北村：これ全部ね。みんなフタですかね。

男性：大小いろいろあるんでしょ。

北村：大きさもいろいろあって。

女性：今だってああいうの使ってるがね、鍋のフタに。

男性：それで有名になったんですよ。1cmごとの大きさのを作ったんですよ。普通だったらただ大、小、中くらいだけど。

女性：今でも使ってるねえ。

男性：ああ、入れるものはね。

原田：場所はどこら辺に出してたんですか？

男性：仙田屋さんの前。

原田：ああ、はいはいはい。

男性：あの通りの。

北村：だいたい毎年同じところだったんですか？

男性：そうです。それであの、あまり流行るってんでね、ヤクザが今度ね、大騒ぎになったことがあるんだ。

原田：やっぱり場所代取られるんでしょ（笑）。

男性：それで、市役所の方でもって場所を決めてもらった。この部分から向こうは行商身分、で、こっちからこっちは地元の方みたいだね。そういうふうを決めてもらって。入り口の方は、行商身分という風に決めただんです。それで、諏訪さんからは地元の人。

男性：べっぴんな奥さんが買ってるね（笑）。

北村：ねえ。この方本当に。

男性：いい写真だねえ。

原田：ちょっとアップにしてください（笑）。

男性：ハイカラだ。

男性：やっぱり美人。

男性：ああ、私がこれ。

北村：こちらが。

男性：それです。これが私で。

男性：いいあれだね。

女性：そう。貴重だね

男性：雪も降ってるし。

女性：いい男（笑）。

男性：いい男になってた（笑）。

(4) 高齢者と若者との出会い

全般的に少子化・高齢化が進行する現在の日本の状況の中で、地域映像アーカイブのワークショップ参加者は一般的に高齢層が中心となる傾向が強い。そのような参加者が地域について語りを行う際に、語りの聞き手としての若者の存在は大きい。本ワークショップにおいても、ファシリテーターとして複数の学生が参加したが、こうした方法は参加者からの語りを活性化する効果が期待できるものと思われる。

鈴木：新潟大学大学院の鈴木潤と申します。十日町出身の今年で23…、そろそろちょっと歳を忘れてくるころです。出身は十日町の新座、新座第四の出身です。よろしくお祈いします（一同、拍手）。

女性：会ったような気がする。

鈴木：（笑）よろしくお祈いします。

小林：新潟大学人文学部の小林梓と申します。出身が新潟県の刈羽村、皆さんご存知のところかと思うのですが、平成4年生まれなので、今年で22になります。刈羽村出身なんですけど、あんまり十日町には馴染みがないので、今日はいろいろお話をお聞かせいただければと思います。よろしくお祈いします（一同、拍手）。

江尻：新潟大学4年の江尻晴菜と申します。私は福島県の出身で、いわき市っていう一番海に近い方のところの出身です。全然雪も降らないし、ここら辺のこともあまり分かりません。新潟には3、4年前に大学に進学して来ました。で、小林さんと同じで、平成4年生まれの22歳です。分からないことがたくさんあるので、今日はたくさん教えてください。よろしくお祈いします（一同、拍手）。

森：新潟大学人文学部3年の森翔吾と申します。出身は、十日町の隣の堀之内町の出身です。十日町にも何回か遊びに来たり、自分はサッカーやっいて、試合をすることもあったので、ぜひ皆さんから昔の十日町のお話をたくさん聞けたらなと思います。今日はよろしくお祈いします（一同、拍手）。

北村：よろしくお祈いします。ということですね、今日は若い学生たちと、

それから私も含めて、皆さんにいろいろと当時のことを教えていただきたいと思います。学生たちはみんな平成生まれで、昭和を知りませんので、ぜひ昭和の十日町を教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

4. おわりに

本稿では、地域映像アーカイブの活用に関して、参加者による語りを引き出すワークショップ実践の事例を紹介すると同時に、こうしたワークショップの特徴とその可能性について検討してみた。

本研究は、地域映像アーカイブの活用法を探る新たな試みとして、端緒にすぎない。今後、数多くのワークショップ実践を重ねていき、その内容や手法のバリエーションも多様にしていくことによって、地域映像アーカイブの活用について、より深い知見を得ていくことを今後の課題としたい。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号26330379）による成果の一部である。

【引用文献】

水島久光（2009）「放送アーカイブと新しい公共圏論の可能性」『マス・コミュニケーション研究』 pp.15-34